韻幽養靖

河井醉茗編纂

詩美幽韻

内外出版協會

序に代ふ

梅の實黄ばむなつ木立
いてふの若葉袖にして
うたの卷編む石の上に
薄れゆくなり夕日かげ
をとめぞ風の誘はゞ
艶なるうたにうゝむ
あづまうたみに筆つり
ぬ染め大川の
きめ香
なて

詩美幽韻

目次

巖間の白百合……すゞしろのや……一
いてふ集……夜雨……四三
吾孀布里……葉末露子……四九
春宵臺獨賦……秋曉……五五
白芙蓉……和郷……六一
夢野の夕風……白涙……六六
うらわか草……櫻木歌二……七一
魂のなやみ……紫紅……七八
草苑の人……夏野橘村……八九

潮風すさむ
ちぬのうら
淋しきそらに
生立ちて
結び勝なる
くちびるの
都なれぬが
もどかしく
詫るとも
なき片びさし
たかき楓の
葉がくれに
一つの星は
まもりけり
夢しづかなる
わが軒を

根津の僑居に於て　醉若生

うつしゑ……すみ子……九三
北國磯枕……汀水……九六
輕風茶煙……虹川……一〇一
白雲青山……奥原碧雲……一〇六
八雲の袖……香川翠浦……一一〇
雲無心……醉茗……一一九

詩美幽韻

巖間の白百合

すゞしろのや

一

波の穂あかく海燃えて、
西にくづるゝ夕雲の、
名殘はまよふ岩の上、
今日の別を告ぐるらむ。
南の洋にたゞよへる、
百千の島は一つらの、
潮のけぶりやつゝみたる、
うかぶ翠も見えわかず。
晝は光にれほはれて、
さやかにめにも入らざりし、
火を吐く峯のひらめきは、
闇の沖べをぞ照したる。

醉茗編纂

岬の岩にくだけ散る、
涙のしぶきは高けれど、
翅休めぬ大鳥の、
歸るを追はむ力なし。
大龜うかぶ湊江の、
陰に散りうく花片は、
涙に環をつくれども、
またみだれ行く潮の泡。
イヤライ草の漂ふを、
摘む兒の影も見えざれば、
下に群れよるうろくづの、
鰭こそ水をさわがすれ。

胡沙吹く風を葉に浴びて、
玉を累ぬる香蕉の、
このみは莢をはしりけむ、
こぼれし豆の色ぞ美き。
横たふ幹はをろちなす、
パンダナの樹のうぬれるが、
潮にひたりてあまたゝび、
貝の住處(すみか)となるやらむ。
涼しき暮を一ときり、
飛魚の群飛びめぐる、
珊瑚の礁の水底に、
低く映れる棕櫚の影。

なみほの白き磯際に、
獨木の舟をつなぎすて、
かこは家路に歸りけむ、
たゞ棹のみぞのこりたる。
深き林は紫の、
うすき烟にとざされて、
聲を競ひし百鳥の、
白日の歌はすぎにけり。
塵だにすゑぬ眞砂路の、
翠の陰をとめくれば、
新芽は枝をうちたれて、
老木をつゝむ葉のしげみ。

池に臨める椰子葺の、
軒端のすだれ風見えて、
欄干による嶋の王、
夕立つ雲を仰ぐらむ。
白き小石を並べたる、
床には布ける新筵、
皿にあふるゝ野のこのみ、
山のこのみぞ珍らしき。
夕げをよぶや女の童、
肩にかけたる花束の、
花ひそやかにうちそよぎ、
媚ぶるに馴れしうしろ影。

水草かくれにひそみたる、
池のうろくづ尾を赤み、
玉も拾はむ砂の上に、
人なつかしく來るかな。

母なる君と手をひきて、
岸邊をあゆむ姫皇子の、
たけなす髪にこゝろなく、
はらりと散りし花一瓣。

拂ひし花は池水に、
たゞよひうかぶ一葉舟、
二人の君は涼しさを、
語らひながらかへりけむ。

折しも近き高峰より、
たちまち雨の篠つきて、
木々の梢を洗ひ去り、
浴びをいづる森の花。

名殘の軒陰におち、
眞砂にまろぶ露の珠、
あたりをぐらくなるまゝに、
かはほり飛ぶや羽廣き。

森の遠近かゞり火の、
ほのめきわたる木下闇、
吹なす笛の聲きけば、
しらべゆかしき暮の歌。

みどりのかげに
かくれすみ
夕手まれく
人はたぞ
白雨もりを
あらふさき
花のをだまき
散るらんか
草にこやせる
あだ人の
ざれしかうべを
ふまんより

かゞりに燒ける
ニーの實の
はしりいでゝも
きたりなむ
あつくもゆる
手のひらを
きみのうなゞに
われはまかせむ

二

クンナット花手にまきて、
くちを漱がむ池水に。

谷かけくだる白玉は、
を指にさむく觸るゝかな。
分髪肩をすぐればか、
おぐや涙間にひたりたり。
神にさゝぐる菓を、
供へまつらむ夕なれば、
いはほの前にぬかづきて、
祈のうたをことあげむ。
島のさつをら
ききくあれ
海のいさり男
やすけかれ

棕櫚の林に
風ふきて
夢路すゞしき
あしたより
大蟹のぼる
白濱の
月たゞ細き
夕まで
谷の小川の
せゝらぎを
絃なき琴さ
きゝなして

ふかき林の
山陰に
かれずも神よ
まもりませ
夜ざりくれば
やわらかき
草のしとねを
ふみわけて
風はふかれど
おのづから
木々よりおつる
露にぬれ

かの新しく
咲きいでし
花のかをりを
なつかしみ
胡桃みのれる
山裾の
うす紫の
のべをこえ
老葉若葉の
かさなれる
椰子の林に
あそびませ

朝は鮮きを
たてまつり
夕ばニーを
供ふれど
われをとめこの
臈げて
あまりに面
なまめけば
まつりのころも
まとへども
かしこき神の
みまへかな

山の端うすく
黑ずみて
光をまとふ
笹緣の
色こまやかに
そめなすは
今月影や
いづるらむ
虹のうき橋
とだえして
森より森に
雨はれぬ

つゆあきらかに
みえそめつ
ひかり仰ぐも
ちかからし
誰が吹く笛ぞ
さはやかに
をりにあひたる
しらべなり
風の千條の
細絲の
みだれてなびく
峯の雲

底湧き回る
千々の涙
碎けて空に
うつるかな
山の彼方の
かゞやきは
玉の楷や
匂ふらむ
藐姑射の宮の
み園生の
七つの寶
八重垣の

花の靈や
そびえたる
天のうき舟
かぢとりて
はつるよしもが
よもぎ島
尾上の木立
あざやかに
巖のうへに
あらはれて
百たび鍊れる
久方の

月の鏡は
かゝりたり
靜かにのぼる
影見れば
下づ枝は横に
中つ枝は
幹をかすめて
すぢかひに
また直くのみ
のぶれども
千枝にわかるゝ
上つ枝は

月の桂の
陰さして
風にもまるゝ
葉のそよぎ
一つ一つに
てらすめり
今やはなれん
木々のうへ
小さくなり行く
月影の
めぐりはうすき
色の彩

霓ぞたまきを
ゑがきたる
月のみ神の
みめぐみの
光あまねき
島のうへ
高きみ影に
ぬかづきて
いざやいのりの
うたをはらん
女蘿にとざす岩穴の、
白晝のごとくかゞやきて。

本は一本枝ごとに、
七百咲くてふ百合の花。
花のうてなの紫の、
色うつぐしみ來る鳥の、
五彩の翅しをるゝは、
神こそ天降りゐますらめ。
白玉なせる房ごとに、
つゆこきみだるよのゆるぎ。
洞にひそめる遠つ世の、
黒き風もや通ふらむ。
手をだにふれなば祟るべき、
花は一瓣もちらねども、

少女さびすとわが胸に、
さゝば大神やどりなむ。
二つの翼生ふるれば、
虹のみ橋に袖ふりて。
櫻八重咲く敷島の、
五百重の涙に嘯かむ。
老いぬ藥を授からば、
牡丹匂へるもろこしの、
大城の庭のあし鶴を、
友にや雲に乘りてこむ。
こは仙人の夢にして、
神さびたりなあまりにも。

長き裳裾は曳かねども、
われ姫皇子の玉簪。
足乳の母の御手にだに、
ぬかせまつるはまれらなる。
大宮内にうまれては、
產衣ゆたかにはぐくまれ。
現女神とめでられて、
いつき少女となりぬるを。
黄金花咲く西島の、
王子のみもとにかしづきて。
珊瑚の舟の纜を、
さゝらぐ涙に解き放ち。

瑠璃なす海にこぎいでゝ、
桂の棹をさしぬとも。
太刀とりなるゝをのこゞの、
强きかひなにいだかれて。
頸環の玉のくだけなば、
かよわき胸のたへざらむ。
舟のへさきをめぐらして、
椰子のこかげにかへる時。
しだり尾長き赤はしの、
鳥の囀いたましく。
面そむくる宮ぬちに、
羅の袖ぬれもせば。

風の一葉とうらぶれて、
寢覺の床やつらからむ。
母のかふこのまゆごもり、
つまれぬ花とみををへば。
鮫に槍うつあらし男の、
淺き思にをしまれて。
深山のこのみあだにのみ、
おちてくちぬといはれんも。
百合のうてなの室ごとに、
かくれましぬる大神の、
ひろきこゝろにかなひてぞ、
幸長しへに盡きざらむ。

さばかり神のまもります、
われは思へばいつの夜か、
分髮祝ふさかもりの、
うたげのともし輝きて、
父がしたしく銀の、
環をうでにかけしをり。
なれは年月大神に、
いのりてこそはうまれしか。
月影白きさむしろに、
椰子は繪のごと影を曳き、
星あまたゝび空を行く、
夜半に產聲あげしなり。

ゆめおろそかに思ふなと、
をしへたまひしこともあり。
さらば神の子わが衣に、
百合の花ひらさしぬとも。
すがたよそほふためならば、
とがめたまはじ大神も。
こゝろおちゐてひそやかに、
女蘿の隙ゆ二ひらを、
摘みとりてこそ柔かき、
乳房のうへにかざしけれ。
清きかほりは龍のすむ、
宮居の壺の酒ならむ。

ましろの色は織女が、
たちし千ひろのきぬならむ。
雲の夕凝るいたゞきに、
よろづの山を見るごとく。
みかどの位さづかりて、
冠戴く朝のごと。
戰の庭に笛吹きて、
城にをのこをよぶがごと。
望はるけき天地に、
あやしくあがるわが心。
御空仰げば七星は、
紫金の色をあらためて、

芭蕉の幹の廣き葉の、
　かさなるうへに影をなげ。
西にかたぶく明星は、
　寂しき天の戸をいでゝ、
沈める船の帆ばしらを、
　うちてくだくる涙にすみ。
雲にまよへる三つ星は、
　若き光を包めども、
岬を洗ふ黒潮の、
　うづまくうへやてらすらむ。
戀草茂る天上の、
　銀河の水に風立ちて、

深き泉の濃紫、
　流るゝ星の花を吹き。
紅葉の渡狹霧こめ、
　つらき別の朝のごと。
歩は遲き彦星の、
　錦の衣ほころびて、
高き通路牽く牛の、
　はづなは涙にぬれにけり。
夜のみ神の月影は、
　こよひ圓かにみちたらひ、
ほがら〳〵と大空の、
　風にのりてや渡るらむ。

雲の涙間にたゞよひて、
　夜すがら西に流れたり。
ひろき光のはろ〳〵と、
　千里の色ぞ輝ける。
白き翼に弓ひきて、
　誰か國土に射おとさむ。
森の木の間の葉を茂み、
　影こそ近くさまよへれ。
月の光を身にあびて、
　星の車を袖にうけ、
わけ髪ながくなびかせて、
　高くかゝれる空の海の、

はてなき橋の下かげに、
　男神女神の名をよべば。
晝の男神の行く道の、
　村立つ雲に弦伏せて、
紅の日の涙間より、
　光の白箭放てども、
星の炬火たきすてゝ、
　夜は獵夫のかへりこず。
萬の光衰へて、
　炎はきゆる流れ星。
照せる月にくらぶれば、
　塵ひぢにだにまさらんや。

こよひみ神のうてなより、
白百合の花二よこひ。
さやけき影を前にして、
まほにむかへばをみなごの、
あがるこゝろをれさへかね、
胸の波ころたちまされ。
みどりのかげにいこふとも、
白日の夢をむすぶとも、
白雨森をあらふとも、
いろべの涙にかつぐとも、
海に立ちたる紅の、
火柱の火をさけえんや。

朝は東に羽をふり、
夕は西に勝鬨の、
豊旗雲をなびかせて、
休む時なき日の軍。
天の炎をなげかけて、
やきはらへども椰子の原。
廣き葉裏に月さゝば、
よみがへるらん島と海。
み神のれはす望月の、
かゞやく宮ゆ吹きおちて、
夕ざりくれば遠近の、
百千の小枝うちろよぎ。

この島國もをしからぬ、
涼しき風はたちぬめり。
あゝ電のひらめきて、
いかづちのなる天雲の、
上に烈しき火柱の、
たけき力にくらべ見て、
雲井冴やけく照りわたる、
月のみ神のたゞへごとせむ。

三

朝の月のほの〳〵と、
棕櫚の葉末に白む時、
塒はなるゝ鳥の歌、
別の袖のつらき哉。
石を拾ひて夕月の、
沈める池になげやれば、
一つ一つに輪をまして、
果(はて)は岸邊にきえにけり。
夜渡る月の夜を寒み、
八重の照妙かさぬれど、
朝吹く風にぬぎ去れば、
白日の月やのこるらむ。
弓張月をたとふれば、
水草に伏す鰐ざめの、

鱗の銀をふるふごと、
光は雲を破るかな。

望の月夜に舟うけて、
月の鏡をのせ行くに、
汐馴衣袖ひぢて、
月も島根をめぐりけり。

下弦の月の弦にふれ、
潮は岩に響けども、
岩燕飛ぶ曉を、
驚ささむる人ぞなき。

椰子の林の葉のかげに、
よる〳〵沈む月影は、
珊瑚の礁の波間より、
さしのぼりたる月ならむ。

宿る陰なき洋に、
ひとり漂ふ月なれば、
かぢをたえたる大空を、
ほがら〳〵とわたるらむ。

紅淡き東雲の、
産湯の上にうつれども、
砂をおほへば夢もなき、
廣野の墓をてらすなり。

かけたる月も來ん夜の、
滿ちくる影の月なれば、

遠き昔も今の世も、
月こそとはにさやかなれ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

かゞみととげる
おもてより、
ほそきけぶりの
たなびきて、
ひかりかくさふ
つきのみや。

花の香たへに
咲きにほふ、
大木のかつら
みきさけて、
みる〳〵月は
かけにけり。

月のみうたを
とのふれど、
たかきみやゐに
かよはねば、
くらくなり行く
天地や。

天の河瀬の
夕波は、
みふねのとゝに
かゝれども、
八重のさぎりの
ひらかんや。
あかがねなせる
あらがねの、
こりてはながれ
ながれては、
うづまきかへる
月のおも。

かゞやきわたる
もちづきの、
花のみやゐは
とこやみの、
よみぢの水に
沈みたり。
月の底より
わきいづる、
くろき炎は
ときのまに、
千尺の上に
もえあがり。

火を吐く山の
いただきの、
洞よりのぼる
こむらさき、
むらさきうすき
色なせり。
大綿津見の
なみのうへに、
影をやどしゝ
もち月も、
み空の月と
わかれけむ。

たつのみやこの
たかどのゝ、
とばりをまける
乙姫の、
袂の玉と
かくれけり。
七百の百合の
花をだに、
むねにさゝずは
をとめごの、
ひめにかくまで
たゝらんや。

いたくにごれる
　人のよを、
にくみたまひて
　とこしへに、
月はきえさせ
　たまひけむ。
星のひかりの
　夕より、
つゆおきまさる
　あしたまで、
椰子のこかげを
　もるゝとも。

百千のかゞり
　あつめたる、
焔の花の
flame tree
　山陰に、
夜すがらさきて
　もゆるとも。
月なき國の
　山河は、
繪にかく花の
　色香にて、
活きたる泉
　わかざらむ。

みそらの海の
　星くづの、
よろづの光
　あらはれて、
かくれし月をや
　たづぬらん。
漣しげき
　白はまの、
玉採小舟
　籠をおもみ、
水に沈みし
　玉のごと。

天の河原の
　かつぎ女は、
髪を結びて
　かつげども、
涙の五百重の
　底深み。
うき藻みだるゝ
　あじろ木に、
かゝれる月の
　鏡こそ、
影もとゞめず
　碎けけれ。

＊　＊　＊　＊　＊

島のかゞりは雲をやく、
焔熾にもえあがり、
空にうつりて金粉を、
散らす火の子のしげき哉。
織るがごとくに火の影は、
東に西にはせみだれ、
亡び行く夜の俤を、
さやかに見する凄じさ。
こゝらの臣を引き具して、
こゞしき岩根ふみさくみ、
島の岬にこゝろざす、
王の姿ぞ雄々しかる。

誰か贈りし東總の、
綠の紐のはし長く、
鞘は黑ざや燒太刀を、
今もはかせと帶びにたり。
鞘を拂へば拂ふ毎、
千度は千度よろづたび、
見るとも朱の血汐には、
あくを知らざる業物も。
み空の闇をきり開く、
降魔の劍にあらざれば、
紫電みだるゝ太刀の面、
匂ふみだれもなにかせむ。

白き珊瑚を織りにたる、
新の庭の冠は、
紅き珊瑚の緣とりて、
輝く珠もちりばめず。
花鳥の影草の像、
ところせきまでゑらせたる、
常のよそひににざればか、
いと淸げにも見えにけり。
前に後に列なめて、
王に從ふ兵者は、
生れぬさきに勝つといふ、
敎をうけて來りけり。

いくさの庭に旗樹てゝ、
鬨をつくれば谷答へ、
山鳴り蛟龍舞ひいでゝ、
靡かぬ草もなかりけむ。
並めたる槍の穗先より、
白き光芒の湧きいでゝ、
くらきみ空に入る見れば、
小さき星ぞきらめける。
千々のかゞりの紅は、
吹きくる風を火に帶びて、
森の木立の一面を、
燒き拂へるにことならず。

かゞりの下にゆきなづみ、
険しといふな兵者よ、
幼き折におぼえたる、
ざれ歌一つうたへかし。

大蟹小蟹

谷のこ川におりてきて
甲はぬがれず
ぬがねばならず
横に這ふたが
落度で御座ろ
をしへて下され
すぐな道

どうせうぞいな
泡もふかれず
めもたてられず
瀧は千丈
壺は藍
岸の椰子の木
ねいろとすれば
波が洗ふて
ゆりおこす
ゆりおこす
おこすのが
とんと面白う御座ろ

椰子ぢやなし
口に善悪ない

大蟹小蟹

發矢とあたろ
椰子の實で
大事な甲を
わつたげな
われたと思ふたら
ぬげたげな
大きな甲は石に成れ
小さな甲は貝になれ
つゞらをりなす山越の、

椰子の枯葉を分けくれば、
ふむに音なき夜の道、
たゞかゞり火ぞおつるなる。

山を下りれば荒磯の、
きり岸高く海見えて、
かさなり伏せる岩の上、
水鳥の糞(まり)たゞ白き。

幾百年の大濤や、
破りすてけむ巖の門、
くゞるにかづらとざせるを、
かゞりにやきてすぎ行きぬ。

半ばたふれし木々の幹、

石より石に根は匍ひて、
洗ふにまかす磯の浪、
いつまですがる危さぞ。
人は通はぬわだなかの、
潮の滿干にたゞよひて、
沈むともなき島の群、
根は奈落より生ふるらん。
末をひたせる大空に、
たけりてのぼる沖つ浪、
嵐に迷ふ舟人は、
棹をとゞむるひまやなき。
岬に着けば兵者は、
ひとしく岸になみ立ちて、
王をめぐらす圓陣を、
最とおごそかに築きたり。
冠をぬぎて岩におき、
祭の壇設へつ、
新菰の上をおもむろに、
王は正しく進みけり。
東の方をおろがめば、
輝ぎわたる星の群、
並めたる槍の穂を拂ふ、
沖つ汐風ほの白し。
赤きかゞりをうちふりて、

荒ぶる浪にさしかざし、
繊身したるあらし男は、
あたりの闇を警めぬ。
とり帶く太刀を兩の手に、
高く捧げて禮ををへ、
王まづ歌をとのふれば、
つゞきて合す兵等。
壇の上は山の花、
野の鳥海の白玉の、
こゝろこめたる齊物、
めづらかなるを陳ねたり。
谷の八谷の奥ふかく、
潜める風も吹きくらん、
坂の七坂末遠く、
おりゐる雲も舞ひいでむ。
天にとゞかば天の果、
地にひゞかば地の底、
とよもしふるふ祈歌、
祭の御庭開かれぬ。
○
谷のかゞりは遠近の、
塘の鳥をおどろかし、
たぎつ早瀬にうつろひて、
炎ぞおつる青き淵。

森の木の間の緩幕の、
火影を帶びて張られしは、
かくれし月をいさめんと、
少女が舞の庭ならむ。
瀧のながれに身をひたし、
肌を淨むるをとめらが、
花のたまきに小夜風の、
しづかに來てはさはるなり。
林の奥のやかたにて、
舞の衣をよそほへば、
耳輪の金に後れ毛の、
二すぢ三すぢ迷ひつゝ。

椰子の枯葉をたきくべて、
かゞり色ます火の影や、
木の下闇のくまゝの、
小草の露も見ゆるなり。
笛は林の風と吹き、
鼓は岸の浪とうち、
かくれし月もあこがれて、
迷ひいでなむしらべあり。
舞の少女のいでたちは、
かしらにかざす忍草、
長き若葉は肩に垂れ、
みどりの髮をかくしたり。

たけの袂を飜へし、
一さし舞へば舞ふごとに、
玉うち觸れて黄金を、
つちに擲つ響あり。
環の花の白玉は、
木の間の螢とちりばめて、
紅皮の靴のまさごぢを、
ふむに輕くも見ゆるかな。
火影に背き歌謠ひ、
裳裾を曳きて露にぬれ、
空より空に白鳥の、
舞ふが如くに舞ひ遊ぶ。

清けきまみも輝きて、
花の面は朱を帶び、
かつらの草のゆるびては、
白き眞砂におつるかな。
破れよ鼓とうちしきり、
管もさけよと笛を吹き、
林の奥の山彦の、
答ふる聲に競ひけり。
舞へば流るゝ流るれば、
涙にけがす花の面、
あつき血しほは身にもえて、
狂ひもいでむこゝろかな。

羽しもたねば大空に、
のぼりもえせずうろくづの、
鰭しなければ海底に、
潜みもあへず月影を、
いかなる鄉に探るべき。
天に冲りしかゞり火も、
さすが焰の衰へて、
一つ消ゆればつき〳〵に、
見えずなり行く島の陰、
夜の光の亡ぶべき、
終の時は來りけり。
仰げば遠き久方の、

雲の通路風死して、
草木は萎へ葉は黄ばみ、
谷の峽に危くも、
黑き月たゞかゝりたり。
○
群たつ雲の
廣ごりて、
墨をながせる
天つそら、
ほしのひかりも
きえにけり。
ひらめきわたる

稻妻は、
裂けし雲間を
彩りて、
奇しき形を
あらはしぬ。
あやめもわかぬ
闇路より、
けたゝましくも
聲たてゝ、
林をよぎる
何の鳥。
きりをふくめる

小夜風の、
いとひやゝかに
吹きくれば、
おのゝきふるふ
松の枝。
闇とこしへに
とざしては、
はるゝ時なき
月の蝕、
夜の光は
ほろびたり。
冲つ藻邊つ藻

なびきよる、
島の岬の
うへにして、
かくれし月を
ねろがみし。
王もいまはや
みまつりの、
にはをけがすに
たへかねて、
宮居にかへり
たまひけり。
東にひかり

西宮に、
ひらめしかへし
稲妻の、
すさまじくのみ
なりぬれば。
夜は小夜中と
更け行けど、
ねぶるともなき
島人の、
むねはおそれに
おほはれぬ。
白くのこれる

炬火を、
かこみてたてる
人のおも、
うなだれてのみ
かたらはず。
天の河原に
沈みてし、
月の光は
さながらに、
夜の電と
なりにけり。
芭蕉の廣葉に

うつりては、
くだけてはしる
白光の、
行衛や人の
世にあらず。
高くたちたる
岩が根を、
ひらめきくだる
幾千條、
海の底にや
入りぬらむ。
すさまじかりし

稻妻も、
たゞ一しきり
をさまれば、
こたびはさらに
色深く、
開かぬ闇に
襲はれぬ。

四

一葉のふねを
海にうけ、
神の御贄と
たゞよへる、

姫の袂や
ぬるゝらん。
櫂とり馴れで
白涙の、
立つをおそれん
くらき夜に、
珊瑚のしまを
さまよふか。
岬をあらふ
黒潮の、
渦まくうへに
ながされて、

千尋の底に
しづみなば。
月の光は
さゝずとも、
さめぬねぶりの
とこしへに、
破れぬ夢を
結びつゝ。
靡く玉藻の
影見えて、
梅の花貝
みだれ散る、

錦の床に
こやすらむ。
二つの百合の
花びらの、
しづかにむねを
はなれては、
かたみを
うみにのこすとも。
ねみだれ髪を
かゝぐとて、
紅潮しゝ
かほばせの、

花なる君は
　かへらじな。
土星(はし)が卷くてふ
　帶解きて、
日の行く道を
　東より、
西に横ぎる
　天津風。
千里の旅を
　夜もおちず、
月のみ舟に
　うちのりて。

きみがころもを
　なびけんに。
海の香たかく
　星とびて、
南にきゆる
　天の花、
わがたましひの
　こゝちせむ。
さすが少女の
　父をこひ、
母を慕ひて
　あくるまで、

舟になくとも
　潮けぶり。
曉深く
　とざしこめ、
かゞり火きゆる
　烏陰の、
しるしの椰子も
　見えざらむ。
綾の袴も
　みだれずに、
蟬の羽袖も
　やれずして、

知らぬ浦曲に
　舟はてば。
玉の小筥の
　ひめごとを、
知らぬをのこは
　おどろきて、
龍のしろをや
　たづぬらむ。
さもあらばあれ
　ひとみなの、
なみだは海に
　ながれいで、

安けき里に
　おくりなむ。
いそべに立ちて
　手をあげよ、
手はあぐれども
　八重の浪、
舟の帆影は
　かくれたり。

＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊

いてふ集

夜雨

花妻

すゞしろのやに
櫻散り浮く大堰川、
嵐の山の花踏みて、
　輕き裳裾をことさらに、
　飜へしたる花の君。
熊野の浦に星落て、
曉深く生れしか、
　媚ぶともなしにほゝゑめば、
　まみに優しき光あり。

白き蓮のやわ肌を、
　鴨の流にそゝぎては、
　鏡になれし黑髮に、
　釵の房のそよめきて。
影さやかなる三日月の、
　眉には車のかゝらざれ、
　ま白き腕菱やかに、
　結ぶしごきのしをるゝは。
關の清水に霧深き、
　長柄の峰を顧みて、
　二夜の夢にさかり來し、
　西の都のこひしとや。

玉蟲さいた唇の、
紅は袖もや染むるらん、
柳の腰に二重まく、
錦の帶のはし長き。
天の川瀨に立つ波の、
高きを恨む織姫か、
梭とりなれぬ新嫁の、
泪は絹に落つるらん。
枕かすめてほつれ毛の、
ね顏にかゝる朝ぼらけ、
すゞかけの酒汲みし夜の、
頰のほのめきはさめたらし。

うすらひ冰くる湖の、
桃は汀に咲きにけり、
霞に迷ふ舟こぎて、
驚かさずや鴉の夢。
涙よりあくる烏羽の江に、
月は影淡く漂ふを、
夢の名殘はつらくとも、
かすめる空に忘れなん。
遠く浮べる筑波根の、
山の裾こそおぼろなれ、
陽炎やゝにはれゆけば、
見よ紫のほつ峰を。

紫尾野の月

薄霧こむる樺が嶺に、
夕の月はさし出て、
影ほの白き谷川の、
水の聲こそ靜かなれ。
一重の衣肌寒き、
山邊に咲ける姫百合の、
裳裾にまとふ花分けて、
辿れば遠き岨路かな。
頼めし姉に別れては、
慰めもなき春の夜の、

花咲く蔭にさまよひて、
泣きたる月や夢なりし。
柔かき手を取交し、
輝くまみを見合せて、
我にもらせし言の葉を、
知るはあらじを月ならで。
磯邊の川のさくら狩、
花を競ひし晴小袖、
さめざる色を徒らに、
ぬらせとのみの紀念とや。
棚引迷ふ雲ひろき、
常陸の空にさすらへば、

潮荒ぶる三熊野の、
　なれし浦曲のこひしきに。
とはにゆるがぬ奥山の、
　巖の蔭の新墓に、
　　眠りたまへばかひに啼く、
　　猿の聲もなれにけん。
夜舟いざよふ月清き、
　海べに吾の歸るとも、
　　八重の涙路のはる〳〵と、
　　君は歸らじ赤島に。
花摺衣花の帶、
　少女さびせし面影の、

月には見ゆる紫尾(しを)が野を、
　獨り歸るか秋の夜に。
風や尾上の松に鳴る、
　み墓のあたり鹿鳴きて、
　　かすかに通ふ聲きけば、
　　あつき涙の頬に流れて。
尾呂の鏡
　しるしなき
　　こひをもするか
　　ゆふされば
　　ひとのてまきて

ねなむこゆるに
水ほの白き鳥羽の江の、
　渚のさくら花ちりて、
　　嫁ぐか君は筑波根の、
　　八重立つ雲の奥ふかく。
蘭麝かをれる閨の戸に、
　尾呂の鏡を手にすれば、
　　かげにおぼるゝ山鳥か、
　　頬に紅のいろさすを。
はなやかなりし獨寐の、
　夢の浮橋なかたちて、
　　まろがれやすき黑髪に、

瑠璃の簪かゞやかし。
とつぐかあはれ、
　つくばねの、
　　むらたつくもの、
　　をちかたに。
やまかげおつる、
　みづうみの、
　　なみまのつきを、
　　かたみにて。
＊　＊　＊　＊　＊
もゝさくあたり、

はなづまと、
こがばなみだも、
なからんに。
しるしなき、
こひをもするか、
ゆふされば、
ひとのてまきて、
ねなむこゆゑに。

* * * * * * *

吾嬬布里

葉末露子

隅田川

そよと眉吹く春風に、
櫻ちりかふあけぼのを、
野暮はさめざれ隅田川。
みやこ鳥浮く花のかげ、
あれよ嗅衆と二人して、
ひとつ櫓をおす川瀬舟。

宵暗

ふなべり洗ふ川浪に、
火影ゆらめく吾妻橋。
月まだ出でぬ宵暗を、
竹屋棹さすわたし舟。
ふりさけ仰ぐ涼しさに、
たゆとぬらしぬ天の川。

江戸の水

さらりとけづる黒かみに、
よこぐしさせる水淺黄。
眉あと匂ふ顔ばせや、
なにを思案の長煙管。

思ひかへして黒襦子の、
そらどけなほす薄袷。
日紅あさくおしろいを、
洗ひすてたる江戸の水。

わが罪

み山に入らむ身ならねば、
世に交はらむその爲に、
おもひ立ちしを旅衣。
ゆるさせ給へ父上よ、
ゆくての塵にたえやらで、
空しく吾は歸るなり。

秋の夜

ながめ淋しき秋の夜の、
月より落つる笛のこゑ、
心な身もさそはれて、
おもひを吹くか里の子よ。

少女

けふりを誘ふそよ風に、
柳のあたり暮れそめて、
青草しげる岸のべの、
春しづかなるいさゝ川。

里にすぐれし手弱女の、
裏のまがきに咲く桃の、
深きにほひも移ろひて、
水の音ほそく流れゆく。

幼兒

くすし浮世をつくりなす、
造化のみ手は放れても、
まだ世に染まぬ幼兒の、
こゝろは神も愛みてか。
ものうちいふも幼くて、
優しき髪をかいなづる、
母の胸乳によりそふを、
塵にけがるゝ罪ありや。
桃色なせるうす絹に、
情をつゝむ頰のにほひ、
そひねの母の影ならで、
夢みる夢もなからんに。

もとの光

ものゝ光も色もなき、
世は常闇の世なりせば、
闇のまぎれに踏み迷ふ、
こゝろの闇はなかるらむ。

人の垣根を打こゆる、
罪のやみちも行かざらむ、
『我』と『人』とを異にみる、
悪の闇路も行かざらむ、
あはれ古ありきてふ、
あめの石屋戸さしたてゝ、
人のこゝろの闇をしも、
もとの光りにかへしなば。

まこと

人てふ人にいとはれて、
なほ寄りすがる蠅もあり、
人てふ人にめでられて、
なほにげまどふ蝶もあり。
よしや姿はみにくきも、
寄りくる蠅を迎へんか、
いかに姿はやさしきも、
つれなき蝶をみすてんか。
心をとりて姿をば、
すてんとすれど捨てかぬる、
こゝろぞ人のまことなる。

山又山

遠くのぞみし山々を、

ふりかへりつゝ故郷も、
近かりけりと越えくれば、
またもつらなる山幾重。

旅路

しばし旅路のわかれより、
はじめて知りし吾おもひ、
いとけなきより隔てなく、
むつび語りし君をなど、
思はざりけむ今日までも。

玉手箱

げにおもしろき玉手箱、
與へし人もおもしろし、
開きし人もおもしろし。
與へざりせばいつの世に、
さとりの箱を開くべき。
三百年のたのしみも、
覺ればたゞの夢なりき、
とこよの國も人の世も、
悟ればともに一なりき。
開かざりせばいつの世に、
迷ひの雲をはらすべき。
開きし人もおもしろし、

與へし人もおもしろし、
げにおもしろき玉手箱。

＊　＊　＊　＊　＊

春宵臺獨賦

秋　曉

常陸へのかへし

今しも渡す大利根を、
吹きぞ過ぎゆく河風に、
衣手さむきひとり旅。
下總かけて上總路に、
我がさす方は近けれど、
解きもかねたり常陸帶。
思ひぞいづる長月の、
雨のなかばに尋ねてし、
雲井の橋か桃源の、
偕樂園の細どのに、
萩のうねりを數ふれば、
ゆたかに鳴らす松の曲。
小雨そぼふる北浦に、
折しも船はあらずして、
わが袖さへも煙りにき。
聳えて高き鋒杉に、
神代のまゝの雲ぶすま、
宮居もいとゞ寂けらし。
眺め果てなきいさご原、
渚の松に日は暮れて、
鼓か琴か遠の海。

潮來が浦に旅寐して、
入江に近きおばしまの、
月に聽しはかこがうた。
長き旅路のをちこちは、
方こそかはれ朝夕に、
見なれけらしな筑波山。
夕雲あかき初日和、
山はれぼろに紫の、
色をばいかに寫さまし。
腰につけたる吾行李に、
さすがに筆はありけれど、
腕をこゝに捨てばやな。

愧ぢつゝ惑ふ折からも、
雲のゆきかふ彼の山の、
かなたに君は在するを。
いかでか秋の一夜さを、
語りあかして口づから、
山の姿を聽きてめが。
霞が浦の秋潮に、
みるめやいかに多からむ、
漕ぎ出る舟の梶をたえ。
よるべなぎさの賤の女が、
眞菰むしろの章をしぞ、
間はまほしくは思ひしが。

翼なき身のいかにして、
雲井を風に翔らんか、
早も月日の待ちたるを。
なれし常陸を跡にして、
都路ちかく下總ゆ、
歸るに名殘惜まれて。
つきぬ心を水莖の、
短きあとに言はせしが、
あはれと流石みられしや。
古里遠くかへりきて、
もて來し苞をくりひろげ、
眼は雲を逐へりしに。

書をしみればこはいかに、
かざしの花の一枝に、
匂ひも深き贈りもの。
かりそめならぬ仰せ言、
受けつゝこゝに吾も亦、
酬いんものゝなからめや。
さもあらばあれ古里は、
月にながめも衰へて、
湖にも氷とざせるを。
せめては胸に立ちのぼる、
炎をそれによそひつゝ、
淺間が嶽のうつしえか。

折からなれやはづかしの、
杜にも通ふ木枯の、
詫しくのこす言の葉ぞ。

即興

野山にしばし風なぎて、
筑波の峰に笠ぐもの、
一ひらかゝる夕まぐれ。
入江に浮ぶ高どのゝ、
浴後(ゆあが)り膚寒からで、
月はかゝれり松の上。
鹿島の浦に小網引く、
海のさつをの許しなば、
漕ぎてや出でむ潮がしら。

匹夫の悔

くはし少女にたゝかれて、
氣疎き音は立るとも、
忍びはかねて捨石の、
折にふれたる涙をも、
苔の重といふかとよ。
玉の盃底ぬけて、
眼は白く世を見れば、
戀に病みもし死にもする、

人の心の脆きをば、
笑ふてかたる我身ぞと、
君やは思ふかりそめに。
さゝやかなれど此中に、
血汐もさすが沸くべきを、
生れてこゝに三十とせを、
送り迎ふるそのかみに、
わがこの胸に篝り焚く、
衛士の一人は見えずとや。
音にこそ立てね色にこそ、
薄紅梅のかんざみの、
かけてもそれと見せねども、
幾とせ秘しさゝめ言、
目ならで送る秋の波。
氷室の裡に身を燒きて、
悶え悶えし愚さを、
彌勒の世にや償(かへ)すべき、
つくろふ面とうらうへに、
心や戀を耻らへる。
誠か君も戀知りて、
わがむくつけき顏ばせを、
映して胸のま鏡の、
早くも曇る五月晴、
明さで過す女々しさも、

君は女のさもあらん、
かくいふわれの男の子こそ、
かたちばかりの髯ならめ。
君と吾との心根の、
通はざりしを今更に、
喞つことかは神々に、
今宵ばかりの此世にて、
君はよみぢに鹿島立。
人目の關のしげゝれば、
君がいまはの枕べに、
握りかはさん腕にぞ、
わが世君が世とりゝに、

これを限りのま心を、
こむるべきとは願へども。
壁にうつたふ繰言の、
甲斐はなくともせめてには、
豫讓が衣を裂きしとき、
襄子が膚も痛からば。

＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊

白芙蓉

和郷

榛名山の秋

波に沈みし橘の、
恨は長き吾妻路や、
昨夜西風音づれて、
樹々を染めけん榛名山。
巔ちかく分けくれば、
宿りし雲も立いでゝ、
天城の峰や金洞の、
巖の峽をめぐるらん。

夢杳かなる八州の、
草は碧につらなりて、
利根の流の蜿蜒と、
天の原にや注ぐらむ。
藻屑となりし獨り娘の、
戀のあはれを渡守、
棹さしながら語りつる、
柳の蔭はみえわかず。
袖にぞかゝる楓葉の、
秋しづかなる湖や、
こもれる松の木がくれに、
ゆかしの節は誰が唄ぞ。

急がぬ馬のたてがみに、
ちらりと落つる紅の色、
葉越の影に照り映にて、
少女のおもの麗はしき。

明けゆく空に生れしか、
さらば蕾の花ならむ、
暮れゆく時に生れしか、
さらば幼き星ならむ。

塵の痕なきその胸に、
この世の思ひ知りそめて、
人はこふとも清らけき、
ゑまひを山靈(かみ)よ守れかし。

黄金色なす樹の上に、
何を呼ぶらむ鳥の聲、
馬おひながら歸りゆく、
家はいづこの霧の里。

日は信濃路にかくろひて、
黄昏迷ふ秋の野の、
末にほのめく薄月に、
さやけき歌は殘るなり。

古き都の跡とひて、
尾花みだるゝ丘のべに、
童がすさぶ笛の音を、
聞し夕もかゝりしか。

ありともみえず山々は、
夜の帳につゝまれて、
冴えゆく天の靜けさよ、
露置く草のやすけさよ。

葦分船

たらちの親のふところに、
ゆふべの星を數へけむ、
昔時の夢もさめぬれば、
此世の風のはだ寒く。

落葉も深き草の戸に、
いり日かげさす天雲や、
梢に殘る秋の實も、
から紅の色そひて。

沖べはれゆく村雨に、
わきくる汐の深みどり、
露まだ消えぬ葦の葉に、
誰れか棹さす一葉舟。

ぬれにし衣を絞りつゝ、
み空ながむる幼兒の、
まみの匂もすゞしきは、
いづくの浦の蜑の子か。

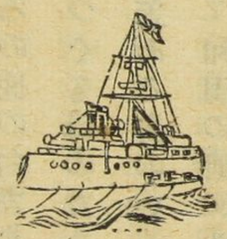
父はと問へばなしといひ、
母はと問へばなしといふ、

家はいづくぞ虹のはし、
なかばかゝれる山を指す。
汀をあらふ小波に、
雲も漂ふ葦のかげ、
すみて冴けきその唄は、
誰にならひし節ならむ。
はや遠ざかる霧の奥、
見かへるおもゝ今いかに、
みねの紫帆のひかり、
やゝに暮れゆく夜の空。
あまが住むてふ磯の邊の、
山の端うすく月見えて、

いさり火消ゆる海の上、
闇の光は迷ふなり。
とまやをたゝく潮風に、
耳をすまして父上と、
隙もる月にかへりみる、
たのしき夢はあらずとも。
薄きしとねに風さえて、
枕に近き水禽(とり)の音を、
寐覺の床にきけばとて、
泪落すなみなし兒よ。
誰ゆゑ惑ふたらちねの、
はるけき天の戸に倚りて、

いとし吾兒に幸あれと、
よな〳〵祈りますものを。

＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊



夢野の夕風

白浪

ゆふづ

浮寐わびしき浪花江の、
あしの障りの繁くして、
わがこぐ舟は荒磯に、
沈みもやらで漂へり。
月にみちくる潮の音は、
小夜の枕になれぬれど、
逆捲く波をかきやらむ。
かいも沖へに流されて。

千鳥飛びかふ播磨灘、
ひめぢのあたり鷗なす、
白帆の影をながむれば、
さすがに落つる涙かな。
やひろの底の白たまを、
かつぐも母のためなれど、
恙ある身のいく代まで、
和田の岬にもまるらむ。
春は昔のふるさとに、
花なき野邊をさまよひて、
しぐるつゝれの袖の上に、
紅葉散るはつらくとも。

書寫の遠やまひろみねの、
朝たつ霞わけ入りて、
あふの松原吹く風に、
過ぎし夢路をたどりなば。
微かに見えしゆふづゝの、
薄き光の消えはてゝ、
又ぬばたまの闇のよに、
歸る嘆きはなからんに。

○

雲やかゝると忘れても、
今は見まじなかゝるとも、
かゝらずとても白鷺の、
城はちさとを隔てたり。

虹

紫沈むひんがしの、
空より雨は篠つけど、
入日に匂ふ夕波の、
色こそまされ一入に。
高根あらひし白雨は、
野島が浦に注ぎつゝ、
和泉淡路の島山を、
高く懸けたる虹の橋。
國のみ祖の二神が、

さぐり給ひし海原の、
矛の車や磯馭盧の、
小島の雲もはれゆけば。
あはぎが原の波間なる、
色まだにぶき日影みて、
立たせし天の浮橋の、
それかとばかり仰がれて。

夜情

浴ひしはてゝ友と吾、
そゞろありきの松原に、
ふりさけみれば懐かしき、
夕つゞ淡くかゞやけり。
小松が末の露落ちて、
しめれば地に塵もなく、
月まだ出でぬ大空に、
風なぎわたる夕まぐれ。
汀によする浪うとく、
星ふりかゝる夜のうみ、
いざ漕出でむ葦が根に、
つなぐ小舟に棹さして。
闇にかゞやく風白き、
ラインの河は知らねども、
波きる櫂にひかりある、

海の眺めもおかしきに。
涙の行方に任せつゝ、
漕ぐ手を止め舷を、
叩いてうたの一ふしを、
汐路はるかに歌はなむ。
白き日影はてらすとも、
うき立つ塵をいかにせむ、
せめて汚れの見えぬ夜に、
夢みるひまぞ楽しかる。
光りをいとふ罪人と、
人はいふともうば玉の、
闇にはえある梅が香の、

夜の思ひに酔ふものを。
見よ西北の山隈に、
かゝる夕の雲多く、
世のひめごとは絶えずとも、
思へば浅き世なりけり。
燈くらきねやの戸に、
うつる吾影ながめつゝ、
罪の刃をとぐ人の、
人見ぬ世とぞほゝゑむを。
夜霧に深き闇のよは、
譽も富もあらざるを、
安きぬむりの枕べに、

神はみまもり給ふなり。
さしくる汐に夜や明けむ、
さらば輝く明星に、
しばし此身を捧げつゝ、
涙のまに〳〵まどろまむ。

初めて夜雨子に逢へる時

薄霧こむる筑波根の、
峰より暮るゝ淋しさに、
さしぐむ涙おさへつゝ、
歌よみませし君かこれ。
西へ〳〵と行く月に、
更けて霜おく大空を、
とわたる雁に音づれて、
賜ひし文のあるじかも。
夢をうつゝの今日なれば、
たゞうれしさに迫られて、
胸にれもひは湧きながら、
其半ばだに言ひ得ぬを。
言葉につきぬ喜は、
溢るゝばかり酒にあり、
君よわがさす一杯を、
言葉なくして受けよかし。

うらわか草

櫻木 歌二

あけゆく海
遠つあふみの、
おきべゆく、
わが乘るふねに、
夜はあけぬ。
うちあふぎたる、
富士の嶺の、
雪より白らむ、
こゝちして。

飛ぶやかもめの、
よついつゝ、
なみの景色も、
おもしろく、
あさ日のかげの、
うら〳〵と、
いまひむがしを、
いづるなり。
みんなみ遠く、
ながむれば、
なみ路のはては、
大そらか。

みそらの末は、
わたつみか、
はてこそわかね、
うみとそら。
かなたにみゆる、
むらくもは、
三原のやまの、
けぶりかも。
うかぶ鯨の、
ふねちかく、
うしほをはくも、
いさましな。

利根川の舟中にて

筑波嶺おろしふきくれば、
打そよめける芦の葉の、
間にひろき利根の川。
末はろ〳〵に流れては、
雲井のそらにつらなれる、
ひがしの海にろゝぐなり。
漕ぎ下しつゝゆく船の、
から櫓の音の末きえて、
烟さまよふこの夕よ。
ゆふつゝ寒き久方の、

雲の涙路をなきわたる、
雁がねきくもわびしきに。
いづこを旅の終りとも、
おもひ定めず故郷の、
空をはなれて十五年。
蓬(とま)をもりくる河風の、
身にしむまゝに立出でゝ、
ひとりみよしにたゝずめば。
けぶるが如き夕月に、
うちつれかへる里の子が、
唄(うた)はさ霧に遠ざかり。
西のみ空に夕映の、

雪ははつかに殘れども、
松原淡く消えて行く。
更けゆく夜半
ねやのねざめのむつ言に、
夜やふけぬらしまくらべの、
とぼし火ほそく消えんとす。
かすかにひゞく鐘の音を、
小指をりつゝかぞふれば、
みづのながれもねむるてふ、
丑の時とぞなれりける。
古井のそこにしづみぬる、

うせにしつまのうらみをば、
忘るといふにあらねども、
こゝろうれしき今宵かな。

汝が片頬にかゝりたる、
ねくたれ髪のなからずは、
かくまで吾は迷はじを。

窓に落葉のはら〳〵と、
しぐるゝ音のさむければ、
妹よと呼ぶにいらへなく、
油やつきしともし火の、
光ははたと消えにけり。

香のけぶりの名殘のみ、
屏風のかげにしろくして、
ふたりぬる夜はなか〳〵に、
黑白もわかぬ烏羽玉の、
闇こそいとゞうれしけれ。

花ゆゑあだにすぎゆけば、
思ふばかりのいろもなく、
にほひあせぬる菫にも、
こゝろをかくる此世にて。

あなやと女のこゑたてゝ、
ふすまかつぎて御佛の、
名を唱ひつゝわなゝくは、
何をにはかにおどろきし。

見よと女のいふまゝに、
かしらをあげてうち見れば、
枕べちかくほの〳〵と、
白き衣をばよそほひし、
ひとのすがたぞたてりける。

誰ぞとよべは此方をば、
むきしはゆめかまぼろしか、
おもひみだれし黑髪の、
長きうらみにたえかねて、
木枯さむきしもつきの、
雨ふるゆふべふるき井に、
しづみし妻のおもかげよ。

光もみえぬあらがねの、
つちの下にはうもれても、
戀てふものゝくやしさの、
ふかきぬたみの忘れかね、
ふたりぬる夜のまくらべに、
殘るおもひのすがたかも。

あらしに消ゆる鐘のおと、
とこよながらのこゝちして、
ものをれもへばあたゝかき、
閨のふすまをかさねても、
更けゆく夜半はさびしきを。

小春の山家

梭のおと、
しづかにひゞく、
小むすめが、
はたや織るらむ。
えんがはに、
ねたる飼猿、
干柿を、
どりてくらひつ。
髯むしやの、
親爺はけふも、
榾火たき、
草鞋をつくる。

せきれいの、
たゝく岩間を、
ゆくみづの、
音はちよろ〳〵。
女房は、
いづこにゆきし、
ふもとまで、
酒買にとよ。
のどけしな、
山家の小春、
すまばやな、
小はるの山家。

ゆふなぎ

亂松相映白沙明、　隔水青山對晚晴、
鷗背無風細波靜、　遠帆如坐近帆行。
（賴山陽）

打臥すごとき磯の松、
梢のみどりうちみだれ、
砂ましろき播磨路や。
水をへだてゝ夕映の、
雲にうつろふ阿波の山、
くれゆく色もなつかしく。
夢路さわがす風もなき、
海の面に浮びては、
眠のどけきかもめどり。
近き帆かげは動けども、
涙の枕にたゞよひて、
行くとも見えぬ沖の船。

魂のかやみ

紫紅

夕づゝ漸く光衰へ、
朧の月の影あはき頃、
小田の蛙のなく音を止め、
獨うらみち畠をよぎて、
うしろ市民の墓をば
さまよふ。

あゝ蕞爾たる賴朝の、
驗は低く七束の、
五輪の苔は茂くして、
跡音を落す松の葉は、

鎌倉山の草と。
變るやいかに雲をつく、
御影の石は天津風、
六十州を蔽へども、
此おくつきに眠るたろ、
蝶を葬る鐘か。
白晝財を掠むるを、
擧りて人は賢といひ、
弱きを挫く强邦を、
義者と賞ゆる進む世は、
小さき已が石に耻づ。
母が御墓に花を採る、

植物學に脩めぬど、
粟の穗一つ實りなば、
苅りて乞丐が羹に、
交へて炊く術もあれ。
實らぬ土の月に日に、
水に投げたる石くれの、
輪よりもはやく廣ごるに、
鍬を捨てたる農夫あり、
桝を惜める賈人あり。
九尺の家は狹けれど、
父の墓は數十丈、
よしや蒲團は薄くとも、

墓石百貫小夜衣、
重きに朽つる梁か。
百萬の市ろくばくの、
人を集めて四里四方、
露降る町に稚兒泣くを、
數へに洩れぬ北邙の、
驗は過ぎし廣さかな。
愚なるかな一片の、
煙と消えし屍に、
鞭うつ子胥を笑ふとも、
長く此世に醜の名を、
止むる阿斯を賞ゆるか。

塚に生ひたる一本の、
女郎花ろれ執着の、
謗りは長し男山、
柳はけむる梅若の、
涙の雨は淺ましや。
櫻に曇る春の夜に、
鐘のもてきし雨雲の、
ふるとも無しに物思ひ、
迷に燃ゆる火の影を、
しばし亡者の言にきけ。
『昔は我も梓弓、
ひくてしげきも衰へて、

柳の糸のやせ馬に、
老ては麟もうとまるゝ、
眉の桂も落代や。
あゝ世にありし古は、
出づれば男女目をひきて、
風にとめよと跡を追ひ、
入れば雲なす浮れ男の、
衣の香による舞の床。
頬の靨は一堂の、
笑みを伴ひ春を呼び、
眉の顰は滿室の、
浮きを沈めて冬ざれや、

心の儘の振舞も。
玉を炊きて髓をとり、
金を湛へて精をぬき、
野にさうびより香を拾ひ、
粧なせば九重の、
扉も光る計りなる。
かの九相の唐歌や、
膏も土にあせ行けば、
瑠璃の眼も一とひらの、
足無き君に及ばしな、
駿馬の骨の價はも。
七日に經の跡絶にて、

葎にしるき塚あれて、
藜に交るつぼすみれ、
消し卒都婆の文字ともに、
人の憐を牽かざらめ。
紅とく居間は殘せども、
遣水流す前栽に、
實のなき花は匂へども、
妹はいかに姉いかに、
梓の弓もひゝかねば。
訪ふ者とても獨たれ、
ろの煩惱の犬じもの、
消るは野火のたく柴や』

怨ずる節にしはがれの、
　梟梢杉になく。
『左のみは云ろあゝ金か、
　契りし誓斷金の、
　交をたつろの刃、
正義溶けて國を賣る、
　ろの片代の孔方か。
燈火細き一燈の、
　長者の萬に輝くは、
　佛の在りし時のみか、
不死の藥は買得べし、
　「誠」に金の價なき。

東に金をつかせては、
　日輪出るを學びしも、
　西銀を山にして、
　月輪入るをうつせしも、
　榮華は僅か五十年。
ろの邯鄲の古や、
　昔戀しき折々は、
　花うばらかの岡の上に、
　我家望めば淺ましや、
　子は親をこれ修羅の道。
蝸牛の角の爭も、
　はかなかりける世の樣や、

天津日照らす公の、
白洲に親子あらがふは、
　我が殘したる禍か。
墓をよきては守錢奴と、
柳の鞭は下せども、
　家には上る線香の、
烟はしげくのぼれども、
　一片の誠濺ぐたれ。
曇るは塩か大磯の、
　男を思ふ虎が雨、
　妓女紅涙に誠あり、
來世にろれは名を垂れつ、

我は皮までくちにしに。
羨ましさよ海防の、
　胸に位は輝けど、
　口には乘らぬ從五位かな、
かの濡髮は金ゆゑに、
　名をすてゝ名を揚げたりし。』
『左のみ名をは夕告の、
　聲は鐘より太けれど、
　夕はさゝがにの蜘の巢か、
　史に記せし蹶速の、
　肋のろれと消て行く。
にのこの土佐に鬪ふも、

斑牛の越に角つくも、
かはらぬ樣や車やる、
馬もどきなる運命を、
土俵の上に決すかな。
向に矢なきかの關を、
われ砂の上に斃しては、
數百の纒頭は山をなし、
海山かけてなり響く、
名は雷ど轟きて。
あゝかの埴輪なかりせば、
宿彌の譽いつまでか、
足柄かけて富士の峯、

兄弟なくば祐泰が、
股野を投げし名はいかに。
一世を掩ふ功名は、
文勳武勳くさ〳〵の、
武藏野品は多けれど、
摘菜に入るは雨ぞらの、
星よりもなほ少けれ。
入りては朝にかしこまり、
出でゝは民を憐みの、
位に並ぶ肩もなく、
千世と榮ゆる君が代に、
肥たる人の尊けれ。』

『左までに慕ふ身なりとや、
げにや果敢なき蜘の圍に、
暴れたる駒は止むとも、
止めかねしは忘れ狎、
生ひづる胸をいかにせむ。
朧にだにも物思ふ、
御影の墓は嚴めしく、
名は此山にとまれども、
人の噂は蒸露鑊の、
よきは篩にとゞめてか。
墓前偶ま現世を、
語るを聞けば大海の、

其一杓の惡を說く、
借りし燈は忘れねど、
からぬ月日は影もなき。
わが失せし日の紀念とて、
墓に香華は民草の、
血と膏より供はれど、
手向の涙一掬の、
物惜みする世の中や。
誤れる哉粟の穗の、
中に斃の人の世に、
二十餘年の政事、
萬世にかほる例なき、

昨日の史は今日の身か。
位万乗玄宗は、
空く殘す遊子の名、
布衣太白が詩の才、
崑崙かけて四百州、
打てば響くる歐羅巴。
ダンテに誇る伊太利か、
沙翁に誇る英吉利か、
非才命を極東に、
一期神祕を探りては、
宇宙は小に塵は大。
鵞ペン走らす紙の上に、

うつゝにあらぬ現世を、
雲ならずして浮ぶれど、
山高く月清くして、
線ひくのみに圖は成らず。
胡蝶に考ふ天の德、
菫に探る地の惠、
星に宇宙の祕を極み、
月に泣く夜は夜鴉の、
暗き浮世を觀じつゝ。
盲の妻は花になき、
世を思出の武夫は、
松風寒き雪になく、

小夜の寢覺は親を戀ふ、
兒のなくねに同ぜずや。
浮世を擧げて萬代の、
教を殘す歌の才、
世界を提げて一代の、
心を留むその業も、
想は高く手は低き。
悶を靜むうま酒に、
売は溶けて寢るとも、
心は走る枯野原、
昨日東に今日は西、
常住かなふ世ならぬに。

あゝ傍にとこしへに、
ぬる兒よ汝はいかなれば、
骨を凍らす紅蓮さへ、
炎はげしき阿鼻をさへ、
笑に迎へて恐なき。
あゝ紅粉もながめには、
酬ゆ値は笑のみ、
力は母の胸をあけ、
智はろの乳を求むのみ、
慾には飢ゑぬ幸や。
國を傾くたをやめも、
鼎を扛ぐるますらをも、

＊＊＊＊＊金の冠きるとても、
位は榮を極むとも、
汝には如かぬ「平和」かな。』
いつしか晴れて手向の桃の、
樒に混じて花狼籍や、
浮世の外にも春風吹きて、
野伏小屋に乳こふ兒の、
もてきし泣音に消しは夢か。
風吹き拂ふ蜘蛛の糸より、
尙易からぬ人の子の世に、
平和の宿は遠に墓所か、
望は失せて過來方を、

かこつか泣くか返らぬ者を。

＊ 蘇東坡の詩
＊＊ 謠曲『賴政』中の句
＊＊＊ 『双蝶々』中の人物
＊＊＊＊ 秋曉詩中の句
＊＊＊＊＊ 『傾城酒呑童子』の一句

草苑の人

夏野 橘村

前の兒

雲の衣を引纏ひ、
女神が乘れる白駒の、
闇より空に入ると見て、
目覺し兒こそ崇とけれ。
搖籃の床をぬけ出て、
駒の行衛や尋ぬらん、
野に小蜂飛ぶ白薔薇の、
蔭にぞ稚子は來りたる。

殘んの星か白露か、
胸に落ちくる朝ぼらけ、
何とはなしにほゝ笑める、
眼にうるはしき光あり。
かゝれば草の蟲すらも、
足のほとりに鳴めぐり、
繁れる森の巢に出て、
雛の山鴿空を飛ぶ。
樹立ぬ原に住むといふ、
獅子もなれ來る人の子の、
清き野詩の聲を聞き、
鶯かけり去る雲の前。

青き香高き草を食む、
村の牧場の小羊に、
しばし化したる狼の、
今はかたちかくせしか。
流るゝ自然の眞清水を、
稚子の惡魔に乞へばとて、
火焔の油くちびるの、
花の蕾にろゝがむや。
露にちる薔薇の花びらの、
草より蝶に生れつゝ、
羽袖縫ひあふ野邊の舞、
見は戲むるゝ夏の風。

吹かれて輕く飄り、
み空に入りし蝶の群、
野には殘りぬ紅の、
衣のみ草にゆらぎつゝ。

後の人

蓮の花の白露に、
開く音ころ黎明の、
光を呼ばう響あり、
まだ夏の夜は山鴿の、
胸毛の内に殘れども、
老いし智人の夢は覺め。

羊二つを引連れて。
野の消遙に出でゝ行く、
鳥の羽衣長やかに、
まとふは麻の白布の、
袖に入れたる詩の卷、
角の小笛を取添へて。
路踐む履に露は散り、
小き蟲飛ぶ草の裏、
蜘蛛のかけたる關多く、
しば〳〵立つや人の影、
おほふ狹霧の樹を罩めて、
風も渡らぬ靜けさは。

今ぞさし來る朝の日の、
光の内に聲ありて、
人をば起せ世の子等が、
生命の爲めにつむといふ、
葡萄は園に番紅花の、
香ある泉も湧き出でゝ。
惠みある世に生れ落ち、
自づと過し智人こそ、
さながら神のみ使の、
雲を履み行く如くなる、
姿崇とみ滿潮の、
浪間に龍は躍るかな。

見よ金色の空深く、
天馬の雲に嘶きて、
青き下界の草を戀ふ、
園には獨り天地の、
弦を動かす力ある、
九十九の翁立すめり。
今日のいのりの言の葉に、
袖を振れば霧消えて、
手をめぐらせば立迷ふ、
鼠の色の雲くづれ、
聲を擧ればみ神ちが、
射る矢の時の流れつゝ。

夏は更け行く一時に、
樹の果梢に紅らみて、
湖近き森かげの、
あけび紫色もつき、
葡萄は棚に味深く、
石榴は甘く實りたり。
春の雛鳥音に啼きて、
木の間をくゞる歌のごと、
高くも清き活る井の、
水の流の調もて、
先づ吹く百合の笛の譜は、
別れていなむみ園生に、
朽ずも遺す音樂の。

うつしゑ

すみ子

はかなかりしなおぼろよの、
袖しか浦のゆふじほに、
くれゆく春の音をきゝて、
松の影はふ岩かどに、
深き思にたどりしよ。
桃の花ちる水上や、
巖の白きほらあなに、
たぎりていづる小泉の、
すめるか色のかぐはしき、
うたに生れてうたにいき。
さびしき光やまもとの、
秀でし蘭の露にゑひ、
砂をいだきて楚の潭に、
恨をのこすからびとの、
情にこがれこひにしす。
あゝうらわかき歌人の、
眉のにほひを月とみば、
かくれてもゆるなさけこそ、
おぼうなばらに照りわたり、
天津ひかりにさもにされ。
あゝ悲みのうたの子の、

胸の思をほしとみば、
流もゆるき古川の、
汀に浮ぶ藻の花の、
尙きは友の身なるかな。

いまうつしゑを手にとれば、
たとへば藤の房長く、
水にうつらふ湖や、
夕靜に旗雲の、
神祕の符を闘ぐごと。

またかのホラの窟幽く、
道を傳ふる天神の、
榊の枝に木綿をかけ、

葉毎葉毎に玉かざり、
みにくき魔を呪咀ふごと。

沈みて重きわが魂も、
岫をいで樹をめぐり、
かのむかつをになびきてば、
愁も雲と散り失せて、
奇しきは友のうつしゑよ。

＊　＊　＊　＊　＊

よべ月の海に霧たちて、
とびわかれゆく五位鷺の、
聲も老いぬる大隅の、

わびしき庭の木がくれに、
かくれてにほふ花をとり。

壁より白き花瓶の、
瓶のもなかに紅の、
さつきの蕊を積みかさね、
友がうつしゑ埋めては、
さびしき笑をもらすかな。

北國磯枕

汀水

《其一》

吹く風ならぬ白露に、
　勿來の關は埋もれて、
　　荻の枯葉の伏しなびく、
　　秋の暮こそたゞならぬ。
朝にけふる鹽釜の、
　祠にぬさをかけまくも、
　　神代ながらの天津風、
　　銀杏葉に知る秋の曲。

千歲の色のこまやかに、
　波にたゞよふ千松島、
　　扇が谿ゆながむれば、
　　夢みる胸もはれにたり。
波おどろかぬあさぼらけ、
　曳く露やゝに晴れ行けば、
　　八百八島あざやかに、
　　松は嵐にうそぶけり。
風冷かに袖を打ち、
　夕くれそむる五大堂、
　　月ふところにいだきては、
　　仙骨さびし無層窟。

觀瀾亭のうたゝねに、
　結びし夢のはるかなる、
　　都の空は三百里、
　　雲遠うして水長し。
旅にやつれて衣川、
　高館あたり霧こめて、
　　袖かへしみる古の、
　　末の松山涙のあと。
寒潮たける荒灘に、
　櫓聲あやつる漁り船、
　　曉深く夜は遲く、
　　一葉の上も安からぬ。

夜はすみまさる大空に、
　綠の星のなほ冴えて、
　　磯にくだくる波の音は、
　　限りなき世に響きわたらむ。

《其二》

白雲なびく恐山、
　太平洋に影映して、
　　萬里の灘を吹きわたる、
　　風に千秋や吟ぶらん。
たける寒潮うちくだき、
　漕ぐや一葉の船のみち、

あらぶる波の飛沫にぞ、
　さがれん島はくもりたる。
みるめ昆布のうかびよる、
　北見の磯のあさかぜに、
　　旅なれぬ身を吹かれては、
　　遠がにこひし古里や。
眞砂吹きまく汐風に、
　きたえし腕はくろがねの、
　　あらくれ男のさす棹に、
　　船は宗谷の岬とほく。
泪ぞ落つる樺太の、
　霜夜の月に夜を行けば、

荒鷲かける北の空、
　西北利亞かけて星稀に。
島と陸(くが)とに別れたる、
　國の境をおもはへば、
　　持てる詩筆も投つべく、
　　そゞろ血汐の湧く覺ゆ。
我まつ人もあらいそに、
　ゆらるゝまゝに船の上、
　　波路にまかす旅の身の、
　　聞くとしもなきよその歌。
宗谷れろしに吹わけられて、
　わたしやレブンの獨りずみ。

小簾もる月

こゝろ惱ます小雨の音に、
　昔のゆめをかぞへては、
　　泪にくらき蘭燈の、
　　ほかげも細る今宵かな、
韻をおくる小夜風に、
　ひらりと花の精のせて、
　　流れはゆるき水の面に、
　　殘せる影もあらずして。
すゞろに痛む胸のうち、
　三諦止觀の月影くらく、

たきりに迷ふあの雲の、
　行方に深き恨みあり。
誰がため吹くか笛の音の、
　幽韻遠くひゞきては、
　　あれ流星の影落ちし、
　　山の彼方におもひ多し。
小簾捲きあげて眺めやる、
　空に漂ふ雲間を縫ひて、
　　もれたる月の光りは淡く、
　　沈める宇宙の哀れは深し。

合歡の花

『象潟や雨に西施か合歡の花』
（芭蕉）

秋のゆふべを、
　きさかたの、
月に泣きしは、
　夢なれど。
小雨になやむ、
　合歡の花、
見ては現に、
　まどひたり。
樣と二人りが、
　袖掛松の、
つらや葉風に、

吹きわけられて。
彼の夕づゝの、
　ひかりをば、
みそらに恨む、
　いまなれば。
かすめる月の、
　おもかげは、
姿見井戸に、
　やどるとも。
あれ〳〵ひゞく、
　波の音に、
共にうたふは、
　いつじややら。

輕風茶煙

虹川

豆ばたけ

ひさしを掩ふ旃檀の、
香れる枝の蔭に來て、
　暑さ洗ひし夕立の、
　名殘涼しき草の上。
光も淡き明星を、
端山の遠にかへりみて、
　交すもかろき夏衣、
　樂しかりしな四つの袖。

小苗涙よる青野原、
心もひろき夕風に、
　畦の細路わけくれば、
　袂に散るか白つゆの。
もろき命をかけてだに、
契りし君が言の葉を、
　繰返しては思ひ寢の、
　よべの夢路は安かりし。
田に水そゝぐ手すさびに、
晴れて添ふ日を數へては、
　めぐるもはやき水車、
　踏む足並もかろらかに。

肱を枕の假寐にも、
優しき聲のかよひては。
やくばかりなる此頃の、
晝のあつさも數ならじ。
朝になびく森かげの、
薄きけむりは妹が宿。
夕はやまの月のかげ、
やさしき君の姿はも。
みづのまに〳〵水車、
月日もいつか廻りきて。
旃檀香る草の戸に、
まとひのよべの待たれつゝ。

白浪の君に

生駒の山に横雲の、
紅はゆるあしたより、
摩耶の遠峰に明星の、
光ほのめく夕まで。
手馴れし鍬を打振りて、
あらすきかへす小山田の、
雲雀の歌をなつかしみ、
菫の床になじみたれ。
煤の烟に黒みゆく、
都の空を望むにも、

黄金と名とに汚れたる、
塵の街は踏まざれな。
振かへりみる白雲の、
空や水なる遠方に、
鷗に似たる帆の影の、
漂ふあたり茅渟の海か。
淡路の嶋に日は落ちて、
影はうすゝ浪花江の、
葦のさわりの繁かるに、
嘆くか友のいたはれて。
白絲きよき布引の、
瀧のしぶきと亂れては、

絞るにあまる君が袖、
朽なん色ぞ惜まるゝ。
眞砂路ながき湊川、
堤になびく青柳の、
霞みて匂ふ有明に、
暫しはやすき夢路さへ。
蘆屋のはまにやく鹽の、
烟も低き松が根の、
寄せぬひまなき白浪に、
濡れもぞする藻川舟。
月の光にあこがれて、
世の岸遠く漕出ては、

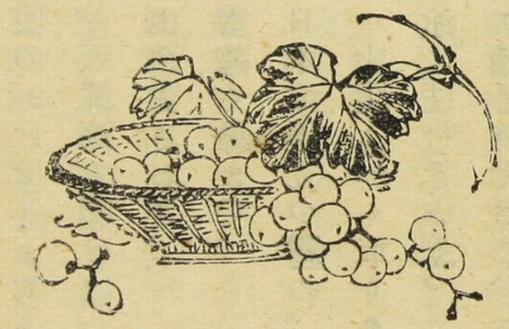
かへすにつらき水馴棹、
和田の岬ぞ汐早き。
行方もしらに舵をたえ、
逆捲浪に沈みなば、
千尋の底のしら珠を、
探るもかひは無かるらむ。
鷗浮べる鷺洲江の、
浦江の波は淺くとも、
蘆の葉そよぐ風もなく、
汀の水も清かるに。
望に滿つる春の野の、
雲雀の歌になじみなば、
若草香る小堤に、
君がなやみも晴れなんを。

手枕

きた風寒き野に出でゝ、
青菜種うるか若人よ。
堤の小艸霜拈て、
あぜのつちさへ凍れるに。
とくかへりませ我妹子の、
火の香匂はせ君待つを。
こがね海なす菜の花の、
ゆくての春は樂しくも。

その曉の雨多く、
仇なる風も添ふものを。
温き妹が情けの手枕に、
苦しき今日を忘れずや君。

＊　＊　＊　＊　＊　＊



白雲青山

奥原碧雲

白雲微吟

海拔五千八百尺、
山陰山陽十國の、
山河をこゝにみ下して、
雲を凌げる出雲不二。
千古の靈峯空高く、
紅蓮の焰逆立てゝ、
巖を熔かす火柱や、
熱砂雨ふる裾野原。

天地分かぬ混沌の、
今は昔の跡とめて、
雲のかけはしよぢ上り、
天風高く嘯けば。
中國山系雲さわぎ、
殷雷遠く轟きて、
日本海邊立つ霧の、
山腹ふかく取りまけば。
赤松池に住むといふ、
蛟も龍も時を得て、
荒ぶる風を叱咤して、
猛り狂ふか今はしも。

清澄一碧隈もなく、
拭へる如き大空は、
またゝくうちに搔き曇り、
篠つく雨は瀧のこと。
電光石火すさまじく、
奇寒肌にしみ透り、
靈氣五體を廻り來て、
暫したゞれる天つ國。
羽化登仙の夢さめて、
風は收り雲晴れて、
山の紫色動き、
夕陽まばゆく照す時。

下界遙かに見下せば、
山々近く水脈長く、
高麗山あたり七色の、
虹霓(にじ)のかけ橋さやかなり。

友におくりし歌

敎への道に西東、
南に北に別れては、
駒の足並隙をなみ、
四年の夏もめぐり來ぬ。
春風おそきみ山路の、
花の色香はうすくとも、

若葉の緑岩清水、
すゞしき蔭はあるらむを。
流れも清き簸の川の、
其みなもとを尋ぬれば、
八雲立つてふこの國の、
尊き史の跡ときく。
うき世の塵を外にして、
緑したゝる鳥髪の、
峰のこなたの麓こそ、
我とふ君が寓所(やど)とかや。
あはれ昔に立ちかへり、
出雲武雄が殘してし、

功績のあとを忍びては、
妙なる歌も多からむ。
みるめ刈るてふ筆の島、
硯のうみの朝なぎに、
眞珠拾ひしいにしへを、
ゆかしとだにも思しなば。
玉の小筥に秘めませる、
詩集をのせて出でたまへ、
君を「まつら」の山川は、
姿よそへて待つらむを。
千鳥の城は雲を凌ぎ、
龜田の松は色そへて、

枝をかはせる下かげに、
風のしらぶる琴をきゝ。
宍道の湖の夕なぎに、
涼しき月の影のせて、
舟ばた洗ふさゞ浪に、
ありしその上語らはゞ。
つかへし胸もはれゆきて、
袖のうら涙立ちかへり、
嫁が島邊の松風も、
千代の調やあはすらむ。

八雲の袖

香川翠浦

八雲たつ出雲八重垣つまごめに
八重垣つくるその八重垣を。

日隅の宮

十里の旅の破草鞋、
神戸の平野日は落ちて、
行手おぼろの綴手道、
星ぞひとつのしるべなる。
千歳古りたる神杉や、
灯の影も見えそめて、
神代ながらに笛竹の、
闇に澄み行く床しさよ。
旅のやどりに一夜ぬて、
狭霧こめたる神垣(ヒモロギ)や、

日隅の宮の大前に、
清き心にぬかづけば。
千木高しらす大宮の、
御階(ミハシ)のあたり神さびて、
朝潔めする宮人の、
箒のあとに鳩あそぶ。
羅の裾ひるがへし、
舞ふや八乙女袖輕く、
おぼろかに見し前髪の、

黛たき影ぞ忘られぬ。
神代ながらの杉に、
朝日の光さしそひて、
榊にやどる白露に、
幽にひゞく神樂歌。

稻佐の濱

日本海のあさなぎに、
ゆるく白帆を孕ませて、
行方やいづこ白雲の、
はても涙路の空遠し。
西の山脈(ヤマナミ)延々と、
末は涙間にかくろひて、
中に秀づる三瓶山、
尾の上に近く雲迷ふ。
月の千里を照らすとき、
渺く潮の寄するとき、
千萬神を打のせて、
あけのそぼ舟泛ぶらむ。
琴のしらべに神の歌、
遠つ雲井にひゞく時、
天つ御神もおりたちて、
ともに調や合すらむ。
別れて來にし我友は、

今も思に沈むらむ、
稲佐の濱に歌もなく、
行む影も眼に見えて。

日の御崎

稲佐の濱をけさたちて、
二里の山路を踰に來れば、
宇龍(ウリヨウ)の港蜑の子が、
昔ながらの歌をきく。
御崎の宮を伏拜み、
羽ばたく鳩にものいひて、
松の並木の磯づたひ、

岬のかたに辿り行く。
柴負ふ姥に言問ひて、
みちなき逕をわけ行けば、
烟ぞ見ゆる茅の軒、
浮世を海人の宿りかも。
垣根の水に物洗ふ、
花の少女に道問へば、
匂へるまみに顧盼(かへり)み、
應答(いらへ)はあらで誰そと呼ぶ。
呼ばれて出でし童兒(わらはへ)に、
送られてゆく道のくま、
かへりみすれば彼の宿の、

門にも人の見送るよ。
磯にそびゆる岩の上に、
際涯(はて)なき天(そら)を見渡せば、
隱岐の島かも涙の間に、
ほのかに浮ぶ山の影。
童を宿に返しやり、
辿る日向(ひなた)の山手道、
雲は時雨をさそひ來て、
沖の白帆もかくれけり。

松江潟

簸伊の河上に掛渡す、
神立橋の朝靄に、
響く轍の音高し。
友の歌草摘みてより、
夢にのみ見し松江潟、
意宇の淡海の俤を、
今日ぞ初めてまのあたり、
見れば心も躍るかな。
五里の涙路に舟うけて、
汽笛の音も勇ましく、
やがて着きぬるかはぎしの、
葉柳茂る橋のつめ、
尋ねん人も遠からず。

友の情にみちびかれ、
日ぬもす探る歌袋、
山と海とにあこがれて、
繪筆詩筆を持たぬ身も、
そゝろ想の泛ぶかな。

龜田の山に聳えたる、
千鳥の城にうち昇り、
雲路のはてを見渡せば、
西に闊くや意宇の海、
東にたつや出雲富士。

白帆ぞ眠る海の上、
碧の空もうつろひて、
彼尾の上には雲低く、

出雲のはてと石見路の、
境に高き三瓶山。

嫁が島邊に寄る浪の、
しらべの歌や何ならむ、
月照寺畔の晩鐘に、
夕日落ち行く浪の上、
浮ぶ鷗の影遠し。

そぼふる雨に袖濡れて、
またもや渡る湖の上、
今宵は友ともろともに、
旅のやどりの欄干に、
清き思を語り明さむ。

湖畔の夢

五里の湖上の舵枕、
着きしはいづこ松江潟、
千鳥の城頭雲白く、
緑は深し浪の色。

友の情の嬉しきに、
雨かもるてふ森山の、
木の下露に袖濡れて、
樂しき夢を結びにき。

傍に笑める紫の、
色美はしきあやめ草、

やどれる露の濃やかに、
清き姿の水かゞみ。

覺めてうつゝに戀しさの、
やるせもなくて見渡せば、
いざよふ雲の一重にも、
よべの名殘のなつかしく。

湖の深きを、
おのが心にて、
とこしへ君を、
こひやわたらむ。

簸の河邊にて

蘆の葉風の靜にて、
小魚むれあそぶ簸の河邊、
過ぎ來し方を見かへれば、
幾重かさなる峯の雲。

波遙かなる北海は、
一重の山にへだゝりて、
八里の穗波の豐なる、
野をいく曲流れ行く。

遠つ神代のかたり草、
船通山の岩窟に、
棲みし大蛇の餌食にし、
葉だれの露と消えにけむ。

黑髮ながきくはし女が、
濺ぎし涙今もなほ、
たぎつ岩根を流れてか、
うゞ逝く水の清きかな。

白帆泛べるをちかたの、
松の並木の影ひくき、
淡き烟を曳くかたや、
意宇の淡海のそれやらむ。

思をのせて廻りゆく、
轍の音を辿るまに、
青葉を洩れて雲に入る、
一畠寺の鐘の音。

掛合の里

降りしく雨に旅衣、
しどろに濡れて辿るまに、
村の三つ四つとく過ぎて、
掛合の里に着きにけり。

旅のやどりを音訪へば、
友は疾くより待つてふに、
草鞋解くまも勇まれて、
共に相見る嬉しさよ。

よそながら聞く此の里の、
幼馴染の身の上も、
心ならぬにあらねども、
明日は踰えゆく八重の山。

欄干(おばしま)近く端居して、
旅のすさびを語りつゝ、
なほふる雨に夜は更けて、
しめる思ひに夢寒し。

意宇の海

遠つ神代の月の夜に、
丸木小舟に眞舵ぬき、
雲の影をし逐ひにたる、
處もこゝは意宇の海。

紅匂ふひんがしに、
雪を戴く出雲富士、
千鳥友呼ぶ夕涙に、
幾代か影をうつしけむ。
水のはろ〳〵はてなきに、
八雲むかふす西の空、
紫深き色のあや、
染めて香はし三瓶山。
霞は薄き千鳥城、
弓絃(ゆづる)の音は百とせの、
昔にかはる花鳥や、
紅羅曳く子の春の歌。
嫁が島邊に寄る涙の、

千代のしらべも更らねば、
蘆の葉そよぐ汀には、
鷗の夢ものどかにて。
松の葉を洩る白露に、
常世の姿さとりては、
うつれる雲に世を思ふ、
若き詩人もありぞとよ。
漣清く山青き、
昔床しき意宇の海、
磯の洲崎に我立ちて、
友を偲びていゆきかねつも。

おうのうみのかはらのちどりながなけば、
わがさほがはのおもほゆらくに。
萬葉 巻三

雲無心

醉茗

かへらぬ涙

不あらふ、ちぬまの浦に、
八百重なす、涙こそきよれ、
照渡る、月清ければ、
まかつみの、潜むも知らに。

きぬ脱ぎて、汐浴みせんと、
うら若き、ますら男の、
玉藻かる、渚を出でゝ、

沖へかも、さかりいにけん。
むら鳥の、立さわげども、
なまよみの、かひこそなけれ、
風なぎて、いさり火遠く、
雲出て、海の面くらし。

水くゞる、蜑の子ならで、
いさなとる、男なるらし、
わだの底、さぐりあてけん、
君をしも、抱きてかへる。

つかのまに、息の緒たえて、
面わこそ、　さあほに變れ、
まこもしく、荒床の上に、
ころぶして、眠れるがごと。

名をとへど、名をもなのらず、
家とへど、　家をもいはず、
たらちねの、母からあるらん、
はしきやし、妻か持つらん。

家しらば、　ゆきても告げん、
妻あらば、　來もとはましを、

立てみる、　人は多けど、
君を呼ぶ、　人もあらなく。

君はしも、　今かわけゝん、
其涙は、　近く來よせど、
薄月の、　うすき光に、
枕せる、　小手もゆるがず。

消やすきは、露とこそきけ、
消やすきは、霧とこそいへ、
うつし世の、うつゝともなく、
過ぎし君は、朝つゆのごと、

夕ぎりのごと。

ゆふかげ草

たゞに情のあるあらぬ、
はかりし故もあらざれば、
心づからとれもほへど、
世に男こそたのまれね。
穂向のよれる片よりや、
よりにし方もあらなくに、
あまりに深く思ひ入りて、
惑へりとこそ人はいへ。
涼しき夜すらいねがてに、

胸いためては吾世たゞ、
とこ少女にてあらましと、
きはめながらもま悲しく。
幸うすからん上にころ、
世を厭ふべき歌もあれ、
足れる此身になぞもかく、
たえず思のつながるゝ。
忍ぶにあまる折口も、
まほに語らふ人をなみ、
母がかふこのまゆごもり、
こもりてころは居らめども。
暮陰草のゆふかげに、

しなえてのみやはつるべき、
妹背の山は遠けども、
面影にしてみゆとふを。

ちぬの海

かへりみすれば大伴の、
高師の濱は遠にして、
月に湧くなる八百潮の、
淡路をはてかちぬの海。
宇奈比男と相きそひ、
妻とひしけんますらをの、
はやち吹捲く汐さゐに、

舟のりしけむ渚かも。
行方もしらに雲のはて、
天とぶ雁のさかりゆく、
聲にまぎれて櫓の音の、
戀に聞く夜やつらかりし。
ふぢえの浦にすゝきつる、
蜑の子ならでうつゆふの、
こもりてたけし津國の、
蘆屋處女のおもかげや。
長き黑髪たがねつゝ、
さしも小櫛のみだれざる、
けたかきふりの夢に入りて、

うつたへにこそこひ渡れ。
怪しううつる物のけに、
今と昔をたがへけむ、
戀ひつゝあらん術なさに、
うつゝともなく舟に乘る。
清水湧くなる和泉路の、
ちぬ男とは生れしに、
みまくほりするくはし女の、
蘆屋の里に今も住めるか。

やほじほ

其舟かへせ蜑の子よ、

野にも山にもあきはてゝ、
こゝの磯邊にさまよへる、
我にをかしき歌もあり。
浮世の岸を遠ざかり、
幸ある沖にひとり行く、
いましと共に漕出なば、
樂しからまし海の色。
眞帆や片帆やゆき通ふ、
舟路のはてはしらなくに、
涙のまに〳〵天ひろき、
雲のゆくへを追はん哉。
いそなれ松の自ら、

眞砂に生ひし身なりせば、
胸は玉藻と清からむ、
其舟かへせ蜑の子よ。

鎖の音

雨に嵐にいたみては、
柿色衣肌さむみ、
なれては己が身をつなぐ、
鎖の音も聞えぬよ。
憤怨にのろふ胸の火に、
朝の露をそゝぎみよ、
一重にも天地の、

深き同情は溢れたり。
神の導く光ならで、
慰みもなき夕まぐれ、
獄屋の夢の安かるを、
しづかに祈れ罪の子よ。

折にふれて

かわよき汝が懊惱は、
世に在るうちの憂愁なり、
君とこしへに滅びざる、
神の授けし義務あり。
劍に書にいさをしを、

殘すや高きいしぶみに、
其名鐫られん丈夫は、
汝が賴むべき友ならじ。
あまき泉を湛へたる、
神の盃口にして、
香に醉ふ汝が歌ふとき、
塵の世ならぬ響あり。
人には業の多かるを、
孤獨行くべき詩の國に、

詩美幽韻 終

いましを呼ばふ所以は、
神の御胸にたゝむらむ。

明治三十三年七月十二日印刷
明治三十三年七月十五日發行

定價金廿五錢

編輯兼發行者　河井幸三郎
東京市本郷區根津須賀町廿七番地

印刷者　島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所　三光社
東京市神田區美土代町二丁目一番地

發行所　內外出版協會
東京市神田區南甲賀町八番地

不許複製

内外出版協會 定期刊行案内書類

書名	發行期	定價	郵税
東京遊學案内	二月八月	金參拾錢	四錢
勞働社會 就業案内	五月	金拾五錢	二錢
就職受驗案内	六月十二月	金貳拾錢	二錢
避暑案内	七月（明治三十四年ヨリ發行）		
讀書案内	九月		
商工案内	十月（明治三十四年ヨリ發行）		
女子職業案内	三月（明治三十四年ヨリ發行）		
東京案内	一月（明治三十四年ヨリ發行）		
海外旅行及移住案内	四月（明治三十四年ヨリ發行）		
英語學獨案内	十一月	金四拾錢	四錢

青年文學雜誌

文庫

内外出版協會發行雜誌圖書

『文庫』は月刊文學雜誌にして青年の機關たるを以て自任す其一大特色は自由寄稿の一事にあり（全國に散在せる幾千の寄稿家中起て文壇一方の將たるべき者少からず而も）來る者は拒まず去る者は追はず編者は唯其作物を檢して其作者を見ず（作物佳なれば昨日新來の客も待つに社賓を以てし否ざれば十年の友も場に登るを許さず）彼の虚名なくして眞才ある青年文士の鑣を並べて（然もにして）快活なる新天地を喜ぶに外ならざるなり清新なる文學に接せんと欲する者は我が誌を讀め自由なる文壇に遊ばんと欲する者は我が誌に來れ

山口高等學校教授
文學士佐々政一著

日本文學史要

《和裝 初版定價金參拾錢 郵稅金四錢》

本書は、日本文學の起原、發達、變遷を叙する歴史にして、天壤無窮の帝室を戴き、秀麗なる富嶽、琵湖の靈氣に養はれたる忠勇にして優美なる日本國民が、上下三千年の治亂と、漢學思想佛教思想等の感化とに由りて、如何なる文學上の發達變遷を爲しゝかは、頗る興味ある問題にして、又國民の知らざる可からざる所也。

目次

序論

第一章　奈良朝以前　日本文學の起原　奈良朝以前の文學
第二章　奈良朝　納說　律語　散文
第三章　平安朝　同
第四章　鎌倉時代　同
第五章　室町時代　同
第六章　江戸時代　同
附　文體變遷の畧表　時代文學畧表

『文庫』寄稿畧則 幷に 定價郵稅表

『文庫』は編纂の資料として小說紀行新體詩史論傳記時文其他文學的評論繪畫及びあらゆる美術的論說自然人生に對する觀察錄斬新有趣なる隨筆日記等を歡迎すそれにつき規則を定むること左の如し

○記事政治に涉るもの若くは風俗を壞亂するの恐あるものは一切排斥す

○原稿の字數は一行二十字詰用紙は半紙大に限らるべし

○寄稿には毎篇必ず住所姓名等を附記せられたし但誌上には匿名又は變名にて出すも差支なし

○文章詩歌俳句等種類を異にするものは各別の紙を用ひらるべし

○文章は篇を異にする毎に用紙を新にせらるべし

○未完の原稿は採用せず郵便端書半切れ繼ぎ紙洋紙美濃紙に書きたるものはすべて沒書に附するものとす字體亂雜の者も亦然り

○原稿紙中には用事の文句を認むべからず

○原稿採否の權は全く記者の手に存す

○原稿返戻の請求に應ぜず郵稅先拂又は不足の者は一切請取らず

定郵價稅表	定價	郵稅	合計
一冊	金拾貳錢	金壹錢	金拾參錢
六冊	金六拾六錢	金六錢	金七拾貳錢
一ケ年（十六冊）	金壹圓貳拾錢	金拾貳錢	金壹圓參拾貳錢
	金一圓六拾錢	金拾六錢	金壹圓七拾六錢

少年園編纂

詩學捷徑

第六版

《定價金貳拾錢＊郵税金四錢》

此の寸珍美本平生一丁寧周密なる圖書の發行を以て名ある少年園より新刊せらる。目次四編に分たれ、第一編には作詩の心得を、第二編には韻字箋を、第三編には作詩便覽を、第四編には通用文字を、孰れも初學詩を學ぶものゝ爲には必須のもの、廿五錢の定價

決して不廉と云ふ可からず。（毎日新聞）

袖珍の美本、而も作詩の法を説きて剩す所無し。嗚呼此書一度出でゝ幼學便覽遂に顔色なからん乎（少年世界）

袖珍二百五十六頁の好冊子にして、今樣に撰しかへたる幼學便覽といふべき者、韻字箋作詩便覽の外、卷首に作詩心得を加へて、詩話、詩法などの興ある節々を纂輯したる所此の書の特色なり。（早稲田文學）

高濱虚子著

俳句入門

第四版

《定價金貳拾錢＊郵税金貳錢》

八篇に分ち、總論に俳句の性質、詩としての位置等を細説し、次に俳句を解すること、俳句作法（寫生、題咏、進歩）季、切字、動不動、緩急及び俳句雜話、順次に説述して、小冊二百三十頁、俳句入門の實を有す。新思想もて俳句を運用せんとする の士には必須の書なりとすべし。（國民新聞）

此書、從來の俳論に比べて、遙に美學的、はるかに系統的、入門者によろしく、而して上堂者にも興あり。文章また雅馴。（早稲田文學）

俗宗匠輩が、或は獨案内と名け、或は手引草と號して印行せるものに比すれば、固より日を同じくして論ずべきにあらず。我は初めて俳諧の道に入らんとする者に、此書を紹介するに躊躇せざる者なり。（帝國文學）

高等師範學校教授
朝夷六郎編

朗吟集

第三版全二冊
《定價金廿錢＊郵稅貳錢》

本書は、師範學校、中學校の學生及び其他の青年をして、朗吟せしめんが爲め、和漢古今の著名なる作者に就き、其の最も明倫の要旨を得たる詩歌を採錄せるものにして、朗吟の際教育上少補あらんことを期せり。凡そ字句巧妙なりと雖も、世教に補なきものは之を熟誦するも何の益あらんや。本書載する所は二者相兼ねたるものなり。且本書には作者の小傳を掲げ、略ぼ其の人と爲りを知らしめ、字句の稍や難きものは之を標註し、特に歌は其大意を解釋せり。

工學士後藤一郎著

寫眞術全書

（定價金五拾錢＊郵稅金四錢）

寫眞は最良絶好の娯樂にして啻に娯樂たるに止まらず又無限の實利實益を有せり、宜なり近時靡然として此術の世上に流行するや。本書は後藤工學士が淵博の識を闡きて著はす所に係り、先づ寫眞術の定義より說き起して、景色人物其他器械の使用、撮影の方法、寫眞一切の術を說明し、圖畫を附して言の及ばざるを補ふ。其叮嚀親切なる、尋常射利的著書と撰を異にす。（東京日日新聞）

人物景色の撮影法は勿論、萬般の寫眞法より、臺紙に張り上ぐる迄の一切順序を、大小となく網羅し盡して餘蘊なく、且つ附錄には當時有名なるレントゲン氏暗光寫眞法より、寫眞定價表に至る迄、丁寧反覆して之を示したる二百七十頁餘の大冊にして、文章も亦頗る平易なれば、何人と雖も理解し得べく、此道に志せる人の座右に備へざる可からざるの良書なり。（人民新聞）

文學士久保天隨著

七寸鞋

（定價金參拾五錢＊郵稅四錢）

天隨君の文は雄放にして清新而して最も長ずる所は紀行文にあり此篇君が紀行を輯めて長篇短篇錯落し五彩陸離たり洵に是れ綠陰消夏の好伴侶羈旅枕頭の好讀物

詩美幽韻正誤表

頁	段	行	誤	正
1	下	七	沖べをゞ	ゝ
35	下	五	松の枝	べハ衍
36	下	一	西宮に	木々の枝
43	下	六	眉には重	西空に
50	上	十	たえ	眉には雲
50	下	四	心な	たへ
92	上	十一	み神ち	ノ下
96	下	六	曳く露	き字ヲ脱ス
103	下	十	藻川船	み神ら
120	上	七	母から	曳く霧
121	下	八	折口	藻刈舟
124	下	七	かわよき	ら衍
			ノ	折々
			ノ	かよわき

334